



危険物安全週間 6月7日(日)~同13日(土)

「訓練で 確かな信頼 積み重ね」

危険物を取り扱う関係事業所をはじめ、市民の皆さんに危険物に対する意識を高めてもらうことを目的に、全国一斉に毎年実施しています。

身近にある危険物

ガソリン、軽油、灯油、消毒用アルコール、塗料、アロマオイル、ヘアスプレーなど、日常生活の中なくてはならないものです。身の回りで使っている物に、次のような表示があれば、それは危険物です。

【例】火気厳禁 アルコール類 危険等級Ⅱ

※このような表示がある物は、火気の近くで使用したり、放置したりしないでください。

ガソリンの携行

ガソリンを一時的に貯蔵するときは、消防法令に適合したガソリン携行缶を使用してください。

※セルフ式のガソリンスタンドでは、顧客が自らガソリンを携行缶などに注入することはできません。

※詳しくは彦根市ホームページをご覧ください。

※2月1日から消防法で、ガソリンを携行缶で購入する人に、本人確認(運転免許証の提示など)、使用目的の確認を行うとともに、販売記録を作成することが義務付けられました。

給油時の注意事項

近年では、セルフ式ガソリンスタンドが多く設置されており、誰でもガソリンなどの危険物を給油できます。給油が安全に行われるよう危険物取扱者がじゅうぶんに監視を行っていますが、給油の手順や機器類の取り扱いを誤ると、思わぬ事故につながります。次の点にじゅうぶん注意して、安全な給油を行いましょ。

- ▶給油の前にはエンジンを停止させて、車が動かないようサイドブレーキを使用する。
- ▶給油する自動車に適した油種を確認する。
- ▶「静電気除去シート」に触れてから給油キャップを開ける。
- ▶給油ノズルを止まるところまで差し込み、給油ノズルのレバーを止まるところまで確実に引いて給油を行う。
- ▶燃料タンクが満タンになれば自動的に給油が停止するので、それ以上の注ぎ足し給油はしない。
- ▶給油キャップを確実に閉める。

春の文化祭

※市内文化芸術団体が開催する協賛事業のみ掲載。

※新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため一部中止・延期(5月21日時点)

文化振興室 ☎23-7810 FAX 21-3080

	行 事	日 時	会 場	入場料
※延期	第30回セルリアン展	6月19日(金)~21日(日) →秋の文化祭期間へ延期	市民会館 ギャラリー	無料
※中止	YOSAKOIソーラン日本海彦根三十五万石祭り	6月20日(土)・21日(日)9:00~20:00	ひこね市文化プラザ グランドホール他	無料
※中止	2020 Group Eri展(洋画展)	6月25日(木)~28日(日)9:30~17:00 (初日は13:00から、最終日は16:30まで)	市民会館 ギャラリー	無料
※中止	琴伝流大正琴淡海琴佑会会第20回発表会	6月27日(土)13:30開演(13:00開場)	ひこね市文化プラザ エコーホール	無料
※中止	第21回ひこね第九オーケストラサマーコンサート	6月28日(日)14:00開演(13:30開場)	ひこね市文化プラザ グランドホール	有料
※中止	第72回青湖会展	7月3日(金)~5日(日)9:30~16:30 (最終日は16:00まで)	市民会館 ギャラリー	無料

▶各行事の延期・中止の詳細は、彦根市ホームページをご覧ください、各団体にご確認ください。

6月12日(金)~7月14日(火)

「彦根藩御用絵師 佐竹永海 一写山楼から愛雪楼へ」

井伊家12代直亮、13代直弼、14代直憲の3代に仕えた佐竹永海(1803~1874)の作品と画業を紹介。永海ははじめ狩野派を学び、のちに関東文人画の雄、谷文晁(たにぶんちょう)の画塾「写山楼」で腕を磨き、多彩な画風で種々の御用をつとめました。



▲鷹図

■【休館日のお知らせ】6月23日(火)

■6月10日(水)、同11日(木)は、展示替えのため、一部休室します。

常設展示「“ほんもの”との出会い」では、譜代大名筆頭・井伊家に伝来した名宝を中心に80点あまりを展示しています。

8月17日(月)まで

笙 銘元永丸 慶俊作

笙は、17本の竹管を束ねた和音を奏でる楽器。平安時代にさかのぼる貴重な古楽器で、作者の慶俊は優れた笙の作者として著名な人物です。匏(ほう、笙の下の部分)は江戸時代の作で、蒔絵(まきえ)で岩に灌木(かんぼく)が描かれています。



▲笙 銘元永丸 慶俊作

彦根藩御用絵師にして江戸の絵師

佐竹永海



第285回

佐竹永海(1803~74)は、江戸時代末から明治時代初めにかけての絵師です。現在の福島県会津若松市出身で、江戸に出て有名な谷文晁の画塾・写山楼で学びました。

天保9年(1838)、永海は数え年36歳で彦根藩主井伊家に召し抱えられ、御用絵師として活躍しました。井伊直亮、直弼、直憲と、3代にわたって仕え続けています。

ここでは、永海の珍しい作品をご紹介します。枝垂桜の一枝と和歌短冊を描いた典雅な掛け軸です(写真)。

短冊には、「追福秋色百二十三回忌、つまり、秋色の百二十三回忌の追善と題して詠んだ和歌がしたためられています。秋色とは、江戸時代前期の秋色女(1669~1725)のことで、俳句をよくした、講談にも登場する有名な女性です。

本名は小川秋、江戸の和菓子屋の娘で、講談では、上野寛永寺の清水観音堂脇の枝に結わえておいた俳句短冊が親王の目にとまり、謁見を

許されたという話が展開します。

秋色女の詠んだ俳句は「井戸端の桜あぶなし酒の酔」。酒酔いした人が井戸端の桜を愛でると落ちてしまう危険があるといった意味合いでしょうか。永海が詠んで画に書き入れた和歌は「経りにける井戸のほとりの桜花 今も青葉に残る面かげ」。秋色女ゆかりの桜は没後123年を経た永海の時代にも存在しました。当時永海は上野の近くに居を構えていたので、彼にとつて身近な桜であったとみられます。ちなみに、この桜は植え継がれて代を重ね、現在でも「秋色桜」として上野公園内の清水観音堂の傍らにあり、その姿を楽しむことができます。

彦根藩御用絵師という、彦根で仕事に打ち込んでいたように思われがちですが、永海の活動の拠点はあくまでも江戸でした。この桜の画は、江戸で暮らす永海が、江戸の名所の景物を江戸人の粋な感覚で描いた作品と捉えることができるのではないのでしょうか。

【彦根城博物館学芸員 高木文恵】



▲枝垂桜に短冊図 佐竹永海筆(個人蔵)

写真の作品は、テーマ展「彦根藩御用絵師 佐竹永海 一写山楼から愛雪楼へ」で6月12日(金)から7月14日(火)まで展示しています(6月23日(火)は休館)。